

## 日々の実践が生きる力を育む

上 廣 哲 治

「『倫理の生命は実践にあり、実践の要諦はその時その場に生きることである』と教わりました。その時その場に生きる実践をしてきたことが、今、仕事の役に立っている。教えのとおりだと実感しています」と、ある壮年会友さんがしみじみとおっしゃいました。

お話をうかがうと、その方は会社で責任の重い仕事を任せられ、節目節目でさまざまな決断を下さねばならない。時には、熟慮する暇もなく即座に決めねばならない事案もある。そのときに、日々の実践で培われたさまざまな経験がものをいうというのです。

会社は、原則、営利事業ですから利益を度外視することはできません。それでも、「我も人もの仕合わせ」の実践してきたその方は、会社の利益だけでなく、顧客や社会全体の利益にも配慮を欠かしませんでした。それがビジネスの上でも的確な決断となり、会社の業績アップにつながったのです。

社会人一年目の青年会友さんからも、同じようなことを聞きました。

「毎日の実践で培われた経験が、多くの将来を左右する決断の助けになりました」

懸命に就職活動をした彼は、幸い数社から内定を得ることができました。入社希望をそのなかの二社に絞ったものの、どちらに入社するか決めかねていたのです。一つは千名を超える従業員を抱え、名前を言えば誰もが知っている大企業。もう一つは地方の伝統品を製造する中堅企業です。彼の第一希望は、事業内容に魅力を感じていたその中堅企業に入社することでした。ところが、受かるとは思っていなかった大企業の内定が得られたことから迷いが生じたのです。両親は大企業への就職を勧めます。そこに入ればある程度の収入と、安定した将来が約束されると思われるからです。最初に希望した道に進むか、将来の安定を選ぶか、選択に悩む日々がはじまりました。

迷っていた彼はたまたま、アップル社の当時のCEO（最高経営責任者）スティーブ・ジョブズ氏がスタンフォード大学の卒業式に招かれて行った講演の記事を読みました。大学を出てこれから社会に飛び立つ学生たちに、彼は次のように語りかけたのです。

「あなた方の時間は限られています。だから本意でない人生を生きて時間を無駄にしないでください。ドグマ（教義、常識、既存の理論）にとらわれてはいけません。それは他人の考えに従って生きることと同じです。他人の考えに溺れるあまり、あなた方の内なる声がかき消されないように。そして何より大事なのは、自分の心と直感に従う勇氣を持つことです。あなた方の心や直感は、自分が本当は何をしたのか、もう知っているはずですよ」

この言葉に動かされて、彼は第一希望の会社に決めようと考えはじめました。自分の心と直感は、将来の安定よりもやりがいのある仕事を求めていると改めて気づいたのです。しかしまだ迷いがあり、最終決断を下せませんでした。そのときに、自分がこれまで積み重ねてきた「その時その場に生きる実践」の経験値が彼に勇氣を与えたのです。自分はこれまで日々さまざまな実践をしてきた。うまくいったと

きもあれば、うまくいかなかったときもある。だからこそ、自分の心と直感を信じて進んだ道ならば、どんなことがあっても乗り越えられるはずだ。今までと、これからの自分を信じよう。それが、「実践で培われた経験が、将来を左右する決断の助けになりました」という言葉になったのでした。

ではなぜ、その時その場の実践をすることが力となり自信を育むのでしょうか？

仏教に「筏の譬え」という話があります。

一人の旅人が遙か彼方の目的地を目指して困難な旅を続けておりました。旅にはさまざまな障害があります。旅人はそのたびに工夫をこらして困難を乗り越えてきました。

ある時、彼の前に大きな川が現れ、それが大雨で増水して行く手を遮っていました。どこかに橋はないものかと探し回りましたが、それらしきものはありません。考えたあげくに旅人は、近くにある草や木々を集めて筏を作り、それに乗って対岸にたどり着くことができました。

旅人はさらに旅を続けていくのですが、また大きな川が行く手を遮ることがあるかもしれません。その時のために筏を持って旅を続けるべきなのでしょう。もちろんそんなことはできません。運ぶこと自体が大きな負担になるからです。筏はそこに置いて旅を続けるほかありません。

この譬えは、「教え」を知識にとどめることなく、生きた知恵にすることを説いたといわれます。

「教え」は困難に直面したときに、それを解決する手段となる「筏」のようなものです。そして、教えは実践することによって初めて困難を乗り越える力となるのです。ですから、教えの言葉自体に執着し、その言葉の背後にある本質を知らなければ役に立ちません。大事なことは、教えを実践で自分の血肉にして、さまざまな場面に応じた対応ができるようになることです。旅人は筏を置いて旅を続けまし

た。なぜなら、もし再び行く手を川に遮られたとしても、筏を作って渡るといふ知恵を身につけているかぎり、筏そのものがなくても対処できるからです。たしかに筏は大事なものです。しかし、それを作って川を渡ったという経験値がなければ何の役にも立たないのです。

もうおわかりですね。わが会の教えを知識として頭にしまいこみ、後生大事に抱えているだけで実践を怠れば、困難を乗り越えるに十分な力とはならないということです。教えを、その時その場の状況に応じて真摯に実践してきた経験こそが、困難を恐れず、それを乗り越える勇氣と力にもなるのです。

私たちは学校生活でテストを受けてきました。テストには必ず唯一の正解があり、それを答えれば点がもらえます。その習慣に慣らされてきたためか、困難に直面しても無意識に、それを鮮やかに解決する正解があると思いつ込んでいます。しかしながら、現実の諸問題には唯一の正しい答えなどまずありません。答えのない問題でも、私たちはそれに向き合い、自分なりの答えを導き出して前に進まなければならぬのです。そのときに力になるのが日々の実践です。わが会の教えは、それを活かすこと、実践することによって真に生きる力となるのです。

そこで今月の実践課題です。うまくいかなかった実践があったとしたら、その実践にこそスポットライトを当ててみましょう。

失敗しないで向上できるのなら、それに越したことはありません。しかし、失敗は避けるべきことではないのです。人は失敗から学び、生きる力を得て成長します。失敗は自分が向上するための経験値であり、前進するための糧でもあるのです。「朝の誓」のとおり、「今日一日」を前向きに、自発的に生き貫いている証なのです。